



特別講演

AV 出演を強要された彼女たち ——沈黙の口がようやく開かれた——

講師：宮本節子さん

2017年6月12日（月）、「ポルノ被害と性暴力を考える会」（PAPS）の世話人・宮本節子さんによる特別講演が行われました。現代社会学科の専門科目「性の人類学」内で行われたこの講演には、当該科目を履修している学生その他、パイディア受講生や学内の教職員の方々など、約120人が参加しました。来場者には、相談支援事業を行っている団体の連絡先が明記された啓蒙的漫画リーフレット『AVに出演させられそうになっている方へ』が配布されました。

2009年に結成された「ポルノ被害と性暴力を考える会」には、2012年からアダルトビデオ（以下、AV）関連の被害相談が入りはじめたと言います。以来、相談件数は上昇し、去年（2016年）は155件にまで膨れ上がりました。宮本さんは、この背景に、性被害一般の社会的認知が進んできたことや相談支援事業に携わる人々の努力・連携などがあると述べます。とくに印象的だったのは「AVという言葉を使うことによって、ストレートにその被害のただ中にある人に響いた」という点です。

実に、ポルノグラフィの中でも、AVは生身の身体を素材に制作されているという特異性を持っています。宮本さんによれば、性行為の多様かつ斬新なバリエーションや残酷さが際立つAV作品であるほど需要が高まる状況のもとで、またそこに「有効なブレーキ」がなかったために、素材＝生身の身体を持つ個人の尊厳や人生が



▲特別講演の様子（筆者撮影）

著しく侵害されてきました。

そのような「屈辱的」とも言える AV の世界に多くの女性たちを引き込み、強制的に繋ぎ留めるのが、モデルやタレントになれるという「夢」につけ込む甘言、膨大な違約金や「親にバラす」といった数々の脅しです。また「私／あなたが出演契約書にサインをしたのは確かな事実……」という責任論は、長らく当事者自らが「出演強要」の訴えに口を閉ざす巧妙なカラクリとなってきました。

しかし状況は、上述したように、変わりはじめています。宮本さんが「沈黙の口がようやく開かれた」と副題に付けたのは、そのためです。重たい口を開かせた（宮本さんをはじめ）AV 相談支援事業の功績は強調してもし過ぎることはないでしょう。

もっとも、すべてを解決できるわけではないようです。AV 相談の中で一番多いのは相談者が出演した AV の回収・販売停止ですが、宮本さんが「インターネットのテクノロジーに救済が追いつかない」と忸怩たる思いで述べたように、今のネット時代それは容易ではありません。

以上の内容の他、具体的な支援のあり方や AV 出演を強要された女性たちがいかに「解放」されていくのかという具体的な過程など、この問題をより詳しく知りたい方は、宮本さんの著書『AV 出演を強要された彼女たち』（ちくま新書）を読んでいただきたいと思います。

最後に、受講した学生のコメントを掲載しておきたいと思います。

「男である自分にとって AV は少なからず関わりがあるものである。今回 AV の実態をはじめ、その AV で大変な事になってしまう人がいることを知った。AV 相談件数が年々と増加しているところを見ると、だんだん相談できる事を知っている人が増えていると感じた。少しでもこのような被害がなくなり、言い方はおかしいが、しっかりとした AV ができると良いと思う。」（現代社会学科・男子学生）

「本日、宮本さんのお話を聞き、今まで自分には遠い問題だと思っていた AV 出演について、とても身近に感じられました。講義の初めの方でお話しされていた 3 歳の女儿や男性も性の対象とされてしまうということを聞き、とても驚いたし、虚しい気持ちになりました。昔の AV は DVD だったので、回収や削除などある程度できたのですが、今の AV はネットで流通してしまっているために、回収や削除が困難であり、被害女性はより一層苦しんでしまうと感じました。AV 出演を強要された被害女性たちはどのように立ち直ったのか気になりました。」（総合文化学科・女子学生）

（馬場淳・現代社会学科）